MARCH／地方国立大出身の独身中年男性たち（1）

――バブル前後世代のその後――

立命館大学　能勢桂介

1　目的

本報告は、男性の晩婚化・未婚化の要因、「大学卒業→正規雇用→結婚」という戦後の標準的なライフコースが崩壊していった過程についてライフヒストリー・インタビューをもとに分析をおこなう。対象とするのは、これまでホワイトカラーとして企業や官庁に大量雇用され、日本の新中間層を形成してきた大都市圏の有名私立大学および地方国立大学を卒業した 30 歳代半ば～50 歳前半（生涯未婚年齢層とそのすぐ下の年齢層）の独身男性である。対象者は結婚適齢期に 90 年代以降の社会変動――とくに職場環境の変動――に遭遇したバブル世代とロス・ジェネ世代に当たる。社会変動が彼らの結婚にどのように影響し、どのような過程を経て独身にとどまっているのか彼らのライフヒストリーをたどる。とくに言語化されることが少ない彼らの焦燥やうろたえを丁寧に読み取りたい。そのうえで独身中年男性の将来と課題を展望する。

2　方法と調査概況

2016 年 9 月～2017 年 5 月までに中部地方の地方都市と首都圏において雪だるま式サンプリングによって得た対象者に対して、これまでの性愛について学校・仕事、家族・友人、趣味との関連に留意しながら半構造化インタビューをおこなった。比較のために対象者だけでなく既婚者、離別者（離婚／死別）による独身、学歴など異なる属性の人にも調査した。現在のところ、インタビューイ―は 30 代後半から 40 代の独身男性 6 名（公務員や一般企業の係長や課長職の中堅職員 4 名；非正規雇用者 2 名）、既婚 1 名（技術職）、離別 1 名（公務員）、高卒独身男性 1 名（非正規雇用者）である。

3　結果・考察

調査結果から未婚要因を分析・考察する。

A 職業・社会的要因：出会いがなければ、当然、結婚することができない。本調査からは正規雇用者であっても労働の長時間性・ストレス、企業再編・倒産などによって女性との出会いが妨げられている状況が見て取れた。非正規雇用者の場合は結婚を断念、親の資産が老後の保障となっていた。また親族、職場の結婚圧力や紹介機能が脆弱化したため、未婚男性は結婚の動機・機会を得にくくなっていた。

B 当事者要因：

①結婚に対する意識化の不在：自身の結婚状況について適切な意識化が出来ずに、出会いを待ち続けていることによる機会の逸失

②マッチングしない結婚条件：家継承のために 10 歳以上年下の女性を探すなどマッチングが難しい結婚条件

③恋愛結婚の困難さ：恋愛には慣れ・恋愛技術が必要だが、それらを習得できなかったため恋愛ができない。恋愛による結婚はある種の男性にとっては困難さをともなう。

④男性／中年男性特有の困難：男らしさの不安や身体コンプレックス（中年太り、ハゲ）などによる女性への気後れ

C 結婚の不完全代替としての風俗や趣味：多くはキャバクラやセックス産業などに通う習慣や通った経験があり、一部は趣味に没頭していた。

今回調査では、ほぼ全員結婚あるいは親密な関係に対する願望があった。そうした中年独身男性たちは職場環境の激変などによって結婚条件を喪失しているにもかかわらず、結婚を意識化・戦略化するのが遅れた（意識が現実に追いついていない）ため、独身にとどまり、漠とした不安をいだいていた。逆に言えば、結婚にこぎつけた男性は意識的に不利な条件を克服することを試み、それが結婚に結びついていた。